中野区教育委員会会議録　平成２２年第３回臨時会

○開会日　平成２２年７月３０日（金）

○場　所　中野区教育委員会室

○開　会　午前１０時０１分

○閉　会　午前１１時５０分

○出席委員（５名）

中野区教育委員会委員長	飛鳥馬　健　次
中野区教育委員会委員長職務代理	山　田　正　興
中野区教育委員会委員	高　木　明　郎
中野区教育委員会委員	大　島　やよい
中野区教育委員会教育長	田　辺　裕　子

○出席した事務局職員（５名）

教育委員会事務局次長	合　川　　昭	
副参事（教育経営担当）	白　土　　純	
副参事（学校再編担当）	吉　村　恒　治	（欠席）
副参事（学校教育担当）	古　屋　　勉	
指導室長	喜　名　朝　博	
副参事（生涯学習担当）	飯　塚　太　郎	（欠席）
中央図書館長（統括）	小谷松　弘　市	（欠席）
統括指導主事	杉　山　　勇	

○担当書記

教育経営分野	落　合　麻理子
教育経営分野	仲　谷　陽　兵

○会議録署名委員

委員長	飛鳥馬　健　次

教育長　　田　辺　裕　子

○傍聴者数　　０人

○議事日程

〔協議事項〕

（１）教科書採択について

中野区　教育委員会
第３回臨時会
（平成２２年７月３０日）

午前１０時０１分開会

飛鳥馬委員長

おはようございます。

ただいまから教育委員会第３回臨時会を開会いたします。

本日の会議録署名委員は、教育長にお願いします。

本日の議事日程は、お手元に配付の議事日程表のとおりです。

本日、事務局職員は、協議事項の教科書採択に関係する職員として、次長、教育経営担当、学校教育担当、指導室長に出席をお願いしておりますので、ご了承ください。

また、教科書採択にかかわる職員として統括指導主事に出席を求めておりますので、ご了承ください。

それでは、日程に入ります。

＜協議事項＞

飛鳥馬委員長

協議事項「教科書採択について」の協議を進めます。

ここで委員会運営について確認いたします。

教科書採択に関する教育委員会の審議過程につきましては、「中野区立学校教科用図書の採択に関する規則第10条」の規定に基づき、採択が行われる日の前日までの間は非公開とすることと定められております。７月28日の臨時会で確認しましたとおり、本日の臨時会も非公開とさせていただきます。

（平成22年第24回定例会において公開の議決がされたため、以下の非公開部分を公開）

飛鳥馬委員長

それでは、前回に引き続き協議を進めたいと思います。

初めに、算数について協議を進めます。

それでは、前回と同じように、各委員の発言の順番をあらかじめお知らせしたいと思います。算数は、山田委員、高木委員、大島委員、教育長、私という順番で発言をしていただきたいと思います。

それでは、山田委員からお願いします。

山田委員

それでは、算数です。

算数は６社から発刊されております。教科の目標としては、算数的活動を通じて、また表現する能力を育てて、算数で活動の楽しさや、進んで生活や学習に活用しようとする態度を育てるということであります。また、今回の改訂の趣旨の中では、これはどこの教科でもあると思うのですけれども、発達や学年の段階に応じた反復、スパイラルということで教育課程を編成するということ。そういった中で選定していく中では、そのスパイラルによる内容の系統性、学習の連続性が工夫されているかどうか。また、特に中野区の子どもたちの学力調査の結果の中では、思考力や表現力が高まるように、そういった意味では、言葉だとか数だとか式、グラフなど等の表現の手段または言語活動に適しているか。最後には、算数ということだけでなく、他の教科との活用ができる教科書ということでのポイントだろうと思います。

そういった中で、６社出ておりますけれども、子どもたちの意見の中で「比較的持ち運びがよく」ということがありますが、日本文教出版については一回り大きい判でつくられております。また、多くの教科書は、１年生は１冊でまとまっておりますけれども、２年生以降は上下巻という形でそろえられているという特色があります。

各教科書ごとに見ていくわけですけれども、振り返り、スパイラルということに重きを置いているという点では、大日本図書、学校図書が比較的充実されているように思いました。

また、子どもたちの思考力とか表現力ということの観点からいきますと、誘導的で、自己解決を妨げるような可能性が出てくる教科書も見受けられます。そういった意味で、余りヒントが多かったりするというのは、難しい話ではありますけれども、「余り丁寧過ぎると」ということが出てくるのかなと思います。

また、他の教科への学習とか、その他へ活用できるということから考えると、今、子どもたちの現場で、算数という教科書はどのようにノートをとるかという視点も大切なことではないかと思います。そういった中では、ノートの書き方などが比較的充実しているという観点からいきますと、学校図書がノート指導が全体に行きわたっていましたり、大日本図書の場合には、最初のまとめでノートの書き方が書かれている。また、東京書籍などもノートの書き方について重要視しているように思います。そういった観点からいきますと、東京書籍、大日本図書、学校図書などの教科書が子どもたちにとって比較的使いやす

い教科書になっているのではないかなと思います。

また、他の教科への学習のことでは、東京書籍では、「世界に誇る新幹線」のようなことが出てまいりましたり、大日本図書では、「わくわく算数ミュージアム」。これは環境とか福祉とか歴史ということに活用できるようなレイアウトになっていました。学校図書は、中学校との兼ね合いで、「中学校へのかけ橋」ということでまとめて書いてありました。

算数ですと、そのものの持っている定義とか意味というものに対して、子どもたちが簡潔にまとめて覚えやすいかどうかというのが一つの観点だと思いますけれども、そういう意味では、日本文教出版ですとか、学校図書、また、東京書籍などは比較的わかりやすく書いてあるかなと思います。

また、算数でいろいろな器具を使うと思うのですけれども、定規とかコンパスの使い方の説明がよく書かれているのは、東京書籍、学校図書。大日本もある程度書かれているかなというふうに思いました。

子どもたちが学びやすく、教員が教えやすいという観点でいきますと、大日本図書、東京書籍、学校図書などが比較的よく書かれているように思いました。

また、時計のことが私は気になっていまして、算数の場合、十進法でいくわけですが、時計だけはいわゆる六十進法ということで見ていきますと、東京書籍は、何時何分という形で時計の読み方が出てくるのですけれども、「短い針で何時と読みます。長い針で何分と読みます」というような型がきれいに書かれています。一方、ほかのところでは、時計のことは出てくるのですけれども、そこまで丁寧なことはなかったように思います。学校図書は、後ろのほうの157ページでしたか、時計を切り取って使うということがありました。教育出版は二つに分かれていまして、1年生の75ページ、132ページに「とけいのよみかた」ということです。日本文教出版では140ページに「とけいをよみましょう」という形で出ておりました。

そういうことで、先ほど言いましたように、大日本図書とか東京書籍は比較的使いやすいのかなというふうに思っております。

私からは以上です。

飛鳥馬委員長

それでは、高木委員、お願いします。

高木委員

今回の学習指導要領の改正に当たっては、「スパイラル」というのが新しく出た概念で、

山田委員からもご説明があったと思います。行って戻ってくるということだと思うのですが、私の理解ですと、それはすごく重要だと思うのですけれども、今までも個々の先生はすでにやっていたのかなと。スパイラルを結構重視している教科書があるのですが、教科書で細かくやっていくというよりも、個々の先生が実際の児童の現状に合わせて行って戻ってくるということだというふうに、私は、教育課程の編成上でこういうことを考慮しなさいよという、いわゆるスパイラル自体が目的ではなくて、あくまで手段だという理解をしております。そういう点でいうと、どこの出版社もそこはきちっと押さえているのかなと。各社特色があって、もちろん検定を通っていますから、一定の水準は担保しているのかなと思うのですが、子どもから見たわかりやすさとかということを見ますと、山田委員も「これが」とおっしゃっていた東京書籍、あるいは大日本図書がいいのではないのかなと。

私の子どもが今小学校２年生と小学校６年生で、ちょうど算数がつまずく学年でございます。一方、最近は塾とかに行っていて、学年をかなり追い越して進んでいるような子がまざっているので、算数は先生が一番教えにくい教科なのかなと思うのです。ただ、そこで基礎基本ですとか物の考え方をきちっと押さえて、子どもがしっかり、例えば塾とかで既習のことであっても、もう１回押さえてきちっと理解していくという観点で言うと、私は、中でも東京書籍がいいのではないのかなと思います。

一つは、図や表が非常に丁寧につくってあって比較的理解しやすいのではないのかなというところと、あと、全体の展開ですね。ほかの教科書会社も悪くはないのですけれども、私はここがいいのではないのかなと思いました。

以上です。

飛鳥馬委員長

では、大島委員、お願いします。

大島委員

私は、全般的に各社の教科書、悪いということはなく、みんな立派なものとしてできているとは思います。ただ、ちょっと細かく見ていきますと、公式、計算の式を示して覚えさせるというのではなく、こういう問題にはどうアプローチすべきかという思考過程を示しているということが大事かと思います。例えば３年生で小数の掛け算というのが出てくるのですけれども、「１メートル80円のリボンを2.3メートル買うと幾らになりますか」というような設問で、それのアプローチの仕方が幾つかあるのですが、その辺を子どもの意見みたいなもので示させるような形で丁寧に書いてある東京書籍とか大日本図書とか、そ

ういう過程をきちんと大事に示しているようなものと、一方、そういう思考の流れということではなく、割とすぐに「こういう場合はこういう式で」というようなことで、式をすぐ出してしまっているような教科書がありまして、ちょっと差があるのかなと思いました。

もう一つは、これは例ですけれども、６年生で「円の面積を求めましょう」などというところがありまして、各社見比べてみますと、扱いに結構差があるのですね。円の面積の求め方は大体二つありまして、４分の１円の図を示して、この中に碁盤の目みたいなものをつくって、マス目が幾つあるかを数えていくというようなアプローチの仕方と、ケーキを切るみたいに細かく切ったものを横に並べていくと、大きい数で切れば切るほど長方形に近づいていく。そういうところから長方形の面積の求め方に近いような考え方で面積を求めていくとか、そういうアプローチがあるのです。その辺の図の示し方が、各社それは示しているのですけれども、説明の丁寧さにちょっと差がある。

それと、円の面積のバリエーションをどこまで扱っているかということで結構差がありまして、大日本図書などは、ほぼ４分の１円のことしか扱っていなくて、バリエーションが少ないのです。東京書籍などは、４分の１円、扇形を右からと左からと重ねますと、真ん中にラグビーボールみたいな形の部分ができるわけですけれども、それの求め方も詳しく説明している。さらに、教育出版などは、大きい円の中に小さい円があるとか、大きい円の中にその４分の１の円を左右、右左、四方向から重ねますと真ん中に残る部分があるわけですが、その残る部分を求めるとか、いろいろなバリエーションを扱っているし、発展的な高度なものまで扱っている。啓林館などはその４分の１の円の求め方だけだとか、結構差がありました。東京書籍ぐらいの扱い方がいいのかなとは思ったりしました。

あと、大日本図書のものも、全般的に見て、さっき言いましたように、子どもの思考過程も結構大事に示している、そういう点から大日本図書と東京書籍がいいかなというふうに思ったのです。

強いて言えば東京書籍のほうがいいかなと思いました点は、一つは、小数という概念を理解させようということで、「1.8とはどのような数ですか」というのを理解させようというところで、３年生の下巻の24ページで、子どもが４人出てきて、それぞれ四角の中で「こういう数字です」とかというのを説明するようなものが並んでいます。上のほうの段に四つきれいに並んでいて、大変見やすくて、こういうのも小数という概念を理解させようという工夫が見られていて、いいかなと思った点です。

それから、１年生なのですけれども、１年生の教科書というのは、初めて算数というの

を学習するので、ここで算数嫌いをつくっては困ると。算数って楽しいなというイメージをつくってもらうということが大事だと思いました。各社、すごくカラフルできれいにつくっているのですけれども、私が東京書籍をいいと思ったのは、白と黄色の小さいタイルが写実的で、片面が白で片面が黄色というタイルの写真がそのまま使ってあるのです。中野の小学校へ行きますと、１年生はあれを使っている場合が多いです。各自持っていまして、１から10までの数字を学ぶときには、その白と黄色のタイルを使ってやるので、それがそのまま教科書にも出ているというのは、すごく身近に感じて、具体的に教科書と自分とを関連づけて考えられるのでいいのではないかなと思った点です。

あと、「マイノート」ということで、ノートの書き方を丁寧に指導してあるというところも、これは、山田委員のお話にもあったように、ほかの教科書でもありましたけれども、そういうノートの指導もいいということ。大日本図書の教科書もいいとは思いましたけれども、細かい点でそんなようなことが幾つかありまして、どっちかというと東京書籍がいいかなというふうに思った次第です。

以上です。

飛鳥馬委員長

では、教育長、お願いします。

教育長

算数は、物事の思考の基礎というふうに考えているのですけれども、そういうさまざまな抽象的な概念をきちんと理解していないと、理科とか、社会とか、統計的な数値とか数字を扱っていくほかの教科への影響もあるというふうに思っていますのと、学力調査の結果を見ますと、どうしても抽象的な概念が出てくる４年生や５年生になってつまずきが見られるということになりますと、新しく取り上げる小数であるとか分数であるとかという概念も、低学年のときからきちんと導入して、導入時期から理解ができるような工夫をしていかないといけないなというふうに考えています。

それと、これもほかの教科でも使うと思うのですけれども、表とかグラフとか図式というようなものもきちんと理解をしていないと、他の教科での作業もなかなかしにくいということになると思います。

それともう一つ、算数というのは数的処理なのでしょうけれども、文章題も非常に出てきて、国語というか、言語理解もしていないと、文章題などを解いていくときになかなか理解が進まないのではないかなということを考えました。そういう新しい概念が出てきた

ときに、きちんと導入から丁寧に理解をさせるような工夫をしてあるということでありますとか、思考の過程がきちんと自分の中で整理できるということや、文章が自分の中できちんと表現したり理解ができるということでは、ノートをきちんととるということの指導が丁寧にされているものがいいなというふうに思ったり。それから、何度も何度も繰り返し学習ができるような。ある程度、家庭の学習の中で振り返りができるということであれば、教科書の中でもそういう工夫がしてあるものがいいなというふうに考えました。

そういう観点で見ていきますと、他の委員からもご指摘がありますように、東京書籍と大日本図書がそういう点でいろいろ工夫をされているなというふうに思いました。両者どちらかということで比べてみますと、大日本図書のほうは、全体的な印象だけなのですけれども、どちらかというと表現もかたい感じがします。それに比べて、印刷の紙の色が明るいということもあるのでしょうけれども、子どももたちの目に優しい工夫がされていたり、図や表がわかりやすいということが印象としてあります。それから、これは大日本のほうもそうなのですけれども、「マイノート」ということで、より具体的に丁寧にノートをつくろうということのページがきちんと各学年に用意されているというようなことがありまして、私としては東京書籍、大日本の順で推したいというふうに思っています。

以上です。

飛鳥馬委員長

ありがとうございました。

それでは、私からです。

算数は、ほかの委員からいろいろ言われているとおりですが、低学年のところは、ブロックとか、タイルとか、いろいろな道具を使ってというのがありますが、それが非常にいいなと思っているのは、東京書籍、大日本、教出あたりかなと思うのです。それから、身近な生活から課題を発見する、あるいは写真等を活用して課題を発見する、これは、今言った３社以外に、啓林、日本文教、学図も全部同じように工夫されているかなというふうに思います。

それから、たびたび出てくる反復練習、スパイラルといいますか、算数では非常に大事なことだと思いますが、これもどこの社もかなり工夫されていると思います。そういう言葉を使っていなくても、高木委員からも言われたように、どこかでそれが工夫されて反復できるようになっている。

それから、意見の分かれるところは、恐らく、ヒントが多過ぎて左右されるかどうか、

子どもの発想が生かされるかどうかというのがあるのかなと思うのですけれども、比較的ヒントが多いのは学図、教出、啓林、日本文教あたりかなと思うのです。東書とか大日本はヒントそのものは少ないのかなというふうに思いますが、どうでしょうか。

今共通した課題のところを話しましたけれども、特徴的なところで申し上げれば、東京書籍は、さっき皆さんから出ているように、５年生の下の12ページと13ページの「算数マイノート」とか。それと連動して、その上のほうの「学び方のページ」というのがあるのですね。すぐ近くのページにあるのです。だから、学び方をやって「マイノート」をつくろうということ。「マイノート」ですので、主体的な学習をする、あるいは表現的なことを考えることを工夫されているのかなという気がします。

それと、東書は、算数はどうしても能力差といいますか、差がつきやすいのですけれども、習熟度別といいますか、そういうのも考慮されて使いやすくなっているのかなと。今、学校で習熟度別学習というのをやっていますので、使いやすいかなというふうに思います。

それから、ほかの方からは余り出てこなかったのですが、教育出版も特徴的なのは、学び方の３サイクル。毎時間の学習と単元の学習と家庭学習をサイクル的にうまくやって、スパイラル的に学習がされるとか。それから、毎時間の学習の場合にも、練り上げていく学習、それをまとめる学習、確かめる、また練習になる。これは多分、３・４年生ぐらいから上でしょうか。全部統一して、そういうサイクル的なことをやっていますので、これもスパイラルと同じように、いいところかなと思います。ということで、どちらかと言えば、私も東書というふうに思います。

それでは、皆様からいろいろ伺いましたが、数で一番多いのは東書、大日本というのもありますが、東書がやや優勢かなという感じがします。山田委員からは、東書も出ましたけれども、大日本、学校図書、三つ同じぐらいの力点でという話を聞いたかなと私は思っているのですが、どうでしょうか。何か補足意見といいますか、今、ほかの委員さんの意見だと、東書というのが強いのですが。

山田委員

委員長おっしゃるとおり、東京書籍、大日本図書、学校図書、それほど大きな遜色はないと思っていましたけれども、先ほど言いましたように、時計の見方とか、そういうところの記述などは東京書籍が比較的よくわかりやすい。あと、低学年での導入などは、委員の皆さんがおっしゃっているように、ブロックの使い方などが丁寧に書かれているということで、東京書籍で別に問題はないと私は思っています。

ちょっとだけ指導室のほうにお聞きしたいのですけれども、３年生のところで小数とか分数は出てくるのですが、教科書のレイアウト上かもしれませんけれども、小数が先に出てくる教科書もあれば、分数が先に、それから、上下巻ですと、上で出てくるところもあるし、下で出てくるところもある。ということになると、３年生の学習指導要領の中で小数とか分数の取り上げ方はどのような記載がされているのか、現場ではどのようにされているのか、ちょっとお伺いをしたいと思っているのです。

指導室長

学習指導要領上では指導の順番は示されておりません。３年生の内容としては示されております。ここが教科書の編集者の考えということになります。ここも議論があるところですが、分数を先にやるのか、小数を先にやるのか、どちらのほうがわかりやすいのか。それで３年生が始まって、４、５、６も同じような形で流れているというところでございます。

飛鳥馬委員長

よろしいでしょうか。

それでは、ありがとうございました。各委員さんの意見を伺いました。その結果、さらに教科書採択基準からしますと、東京書籍が最適だと思いますので、算数につきましては、東京書籍を採択候補とすることに異議はございませんでしょうか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

飛鳥馬委員長

異議がございませんので、算数は東京書籍を採択候補といたします。

次は、理科について協議を進めたいと思います。各委員の発言順ですが、高木委員、大島委員、山田委員、教育長、私の順番で発言をしていただきたいと思います。

それでは最初に、高木委員、お願いします。

高木委員

理科に関しましては５社から教科書が出版されているところでございます。今回の学習指導要領の改正の中では、特に自然の事物・現象について実感の伴った理解を図り、科学的な見方や考え方を養うということで、経験や主体性、あるいは自然や生活というものを重視する流れの中で、理科離れということが一般に言われていますけれども、そこを中野の子どもたちにしっかり位置づけるような教科書を選んでいく必要があるかなと思っております。

そういう観点で言いますと、理科はなかなか難しい。各社特徴がありますし、どの社もいいのではないのかなと思うところでございます。あと、ＡＢ判とＢ判がありますけれども、分冊のものもありますけれども、特に国語のように極端に厚くなるということはないので、どの厚さでもボリューム的には大丈夫ではないか。特に１・２年生は生活になりますので、中・高学年ということですと、それはどこでも大丈夫なのかなと。読んでいてどれをというのが難しいのですが、あえてどれかということですと、教育出版がいいのかなと。苦手な子にはなかなか親しみにくい科目ですので、黒板からノートに書くという流れがきちっと書いてあるということと、全体的なボリュームも教育出版が一番ある。ほかがだめということではないのですが、少ないと理科の場合は展開が難しいかなと思うので。理科は、私も読んでいて難しかったのですけれども、どれか一つということですと、私は教育出版を推奨します。

飛鳥馬委員長

よろしいですか。

それでは、大島委員、お願いします。

大島委員

理科も、どれも悪いということはないとは思いますが、いろいろな点で、細かいところで差があるところがある。例えば３年生の植物のつくりについてのところで、植物の茎とか根、葉っぱ等のつくりについてのイラストつきの解説が各社あるわけですけれども、ここのところのイラストが非常にリアルで、実際に近いかなと思ったのが東京書籍と大日本図書。そのほかのところはリアルな感じではないというような印象を持ちました。

それから、５年生ですけれども、５年生は一番初め、「天気の変化」という天気についての単元から始まる教科書が多い中で、学校図書だけがガレリオ・ガリレイの振り子の法則の発見の話から始まっていまして、これが非常に特徴的なのです。これは、大人が見ますと非常に興味深い、私などは興味深いし、いいとは思うのですが、５年生の児童が見ると、理科が好きな子は大変興味を持つのでしょうけれども、ちょっと難しいかなという印象ですね。

それから、５年生のところで、生命の誕生についてのことがあります。人間の母親の胎内で受精して、おなかの中で胎児になっていくという、人間の生命の誕生についてですけれども、ここのところで、例えば東京書籍などは「思い出そう」ということで、メダカとか、植物の種子とかのことも引き合いにちょっと出しています。その延長線上での人間の

誕生というような扱いになっているのです。これが、例えば教育出版は、メダカなどのことはそこでは全く出てきませんで、いきなり人間のことが出ている。ただ、後では扱っている単元はあるのですけれども。あと、学校図書とか大日本図書も一応メダカのことがちょっと出ていますが、大日本図書は目立たない、学校図書はメダカとか植物の種子のことも出ているとか、そういう違いがあります。私としては、理科で、保健の教科ではないので、科学的な面から生命の誕生ということを扱うという意味では、メダカとか、植物の発芽とか、そういうような生物の命というものの一環として、延長線上でという扱いのほうがいいのかなと。いきなり人間だけが出てくると、性教育みたいな感じがあるので、その辺のところでは東京書籍の扱いがいいかなと思います。

それから、そのときの胎児のイラストのことで、東京書籍などは、おなかの中の絵で、頭が下になっている、実際と同じようなイラストなのですけれども、学校図書とか教育出版は頭が上になっているイラストがありまして、これはちょっと誤解するかなと。実際とは違うというところにちょっと違和感がありました。あと、大日本図書の胎児の20週目の写真が、暗くて、ぱっと見て何のことかわからない写真なものですから、ちょっと写真が不適切かなと思いました。

高木委員がおっしゃった教育出版のものは、目次が折り返しになっているのが大変使いやすくていいのではないかと。後で教科書をあけたときにも、その目次を対比して見ることができるということでいいと思いました。図がとても大きくて迫力があるという点は大変いいのではないかと思ったのです。

それから、言い忘れましたが、各社で違いが出ているのは、５年生の植物が育つときにどういう条件が必要かという単元のところで、植物が育つには、水、空気、温度が必要だということなのですけれども、それをわからせるための実験の説明として、各社、水のあり・なしでどうなのか、次に、空気のあり・なしでどうなのか、温度でどうなのかと順を追って説明しているのです。啓林館などはこの三つを同時に提示しているので、子どもにとっては順番に吟味していく形でないと難しいのかなと。その辺もあります。

全体的には、各社そんなに遜色ないとは思うのですけれども、細かなところで、東京書籍がちょっといいかなという印象を持ちました。

あと、植物のつくりについての観察カードなども、子どもに相応の内容のカードになっていまして、調べ学習の流れも巻頭のほうで説明してあったり、子どもにとっては学びやすいというイメージを与えられるのではないかなと思いました。大日本図書の観察カード

は、３年にはちょっと高度過ぎる内容かなと思ったようなこともありまして、相対的には東京書籍が使いやすいかなと思いました。

以上です。

飛鳥馬委員長

では、山田委員、お願いします。

山田委員

子どもたちの理科離れといいますか、理数離れということでは、３年生から入ってくる理科というのは、今度の学習指導要領の改訂の中で大きなトピックスではないかなと思います。特に問題解決型の学習に沿って教科書というものがどのように編纂されているかということが大切ではないかと思って見てまいりました。

僕は、どうしても生命とか地球とかそちらのほうに目がいってしまうので、例えば４年生の筋肉とか体のつくりなどのイラストですとか、その説明などを見ていきますと、東京書籍では、体育での運動との関連などを骨とか筋肉の動きを使ってあらわしています。大日本図書は、「私たちの体と運動」ということで、骨と筋肉。特に資料で、「理科の玉手箱」ということで、体育でやる準備運動などを取り上げていました。学校図書は「人の体のつくりと運動」というところなのですけれども、私も自分が勉強している過程で、ここでは動物をさわっていろいろな筋肉を確かめているのですが、動物を使わなくても、人間は自分の体で見ることもできるのではないかというふうに思った次第です。教育出版のこの４年生の「体のつくり」の単元では、骨の説明が少し不足しているかなという気がいたしました。啓林館は、「人の体のつくりと運動」ということですけれども、筋肉の働きなどを丁寧に紹介していました。

あと、星座の取り上げ方ですけれども、どの教科書もかなり取り上げています。大日本図書などは、星の明るさや色など、夏の大三角とかそういったものもきれいに取り上げておりましたが、学校図書はその辺がちょっと弱いかなという気がしました。啓林館は、星座のカードがあって、季節による星座の移り変わりなどを非常にわかりやすく書いているようです。

大島委員が指摘されたように、今回の教科書でちょっと驚いたのは、５年生のいわゆる「人の誕生」という単元のところで、どの教科書も、私は医学部の出身ですが、医学部の専門の４年とか５年で取り上げたような図がたくさん出ていて、かなり高度で大変だなという気がしました。要は、人の誕生だとか生命の大切さについて学習する。それも、メダ

カの誕生と見比べながらというところの単元だと思うので、どの教科書もなかなかすばらしく描かれているかなと思いました。頭が上か下かというのは、確かに大切なことではありますけれども、子どもたちにとって胎児がどのように成長していくかという過程を示すということでは、どの教科書も非常に親しみやすいというか、すごいことがおなかの中で起きているのだなということを訴えているということでは、どの教科書もすごい取り上げ方だなと思って感心しました。

その中でも、先ほど大島委員がちょっとおっしゃっていましたけれども、振り返って、受精卵が育つところとか、メダカの誕生と比べて共通するところとかという取り上げ方をしているのが大日本であったり、教育出版であったりということではあります。

全体を通じて見ていきますと、子どもたちに理科というものを親しみやすくするためには、一つには、比較的身近な内容から入っていくということの視点が大切なのではないかと思いました。そういった中では、教育出版は身近な内容のところから入っていく取り上げ方が比較的多い。また、児童の視点でいろいろと事例が示されているという点では、図が大きくてかなりダイナミックだなという印象を受けました。東京書籍も、例えば実験の器具などの使用法が巻末でまとめてあったりして、子どもたちにとって学びやすい教科書の一つかなと思っていました。大日本図書も記入式のページが多かったりして、日常生活との関連もいい内容が書かれてはいるのですけれども、大日本だけが４年生以上は上下巻になっているのですね。これはいろいろ賛否のあるところだと思います。１年を通じてということであれば１冊にまとまっていてもいいのかなという気がいたします。

あと、高木委員がおっしゃっていたように、少し判が違うのですね。東京書籍、大日本、学校図書は比較的大判になっていますけれども、教育出版、啓林館などは前と同じような判ということですので、そういった特色も出ているかと思います。

そんな中では、教育出版、もしくは東京書籍あたりがすばらしいのではないかなと思いました。

以上です。

飛鳥馬委員長

では、教育長、お願いします。

教育長

理科については、疑問に思ったり、課題だと思ったことを自分が自主的に発見して、それを解決していくという過程を学ばせるということが基本かと思っています。そういう意

味では、さまざまな身近な生活の中で疑問を持っていくということを子どもたちにぜひ経験させたいなと思っているのです。各教科書それぞれそういう工夫がいろいろされていたのですけれども、理科というか科学というのは人類の歴史の中で営々と築かれてきたもので、装丁から言うと、学校図書が学年ごとにいろいろな科学者の写真が表紙で大きく取り上げられていて、歴史に属するかもしれませんけれども、学校で先生たちが子どもたちに「こういう取り組みをしてこういうことを発見したんだよ」なんていう話をするのもいいかなと表紙を見て感じたところです。

先ほどから各委員からもありますように、大判とちょっと小さ目の判と両方があるのですけれども、比較的ハンディなのですが内容がコンパクトにまとまっているのが教育出版だというふうに思いました。それから、いろいろな問題解決をしていくということでは、観察ノートとか、記入をしていろいろ発表していくというような取り組みも大事だなというふうに思っていて、観察ノートなどで注目して見てみると、各社それぞれ取り上げ方が違っていて、書かれている内容もわかりにくかったり、感想みたいな思いが書いてあって、事実をどれだけ学び取って書いていくかというようなことに違いがあるなというふうに思いました。

そういう意味で言いますと、観察ノートが比較的多いのは教育出版と東京書籍だったように思います。反対に、カードが少なかったり、見にくかったりというのが、これは印象ですけれども、大日本とか学校図書がそんなイメージがありました。それから、啓林館もちょっと少なかったり、啓林館は写真もちょっと少ないかななどという印象がありました。子どもたちがこれからは一生懸命考えて、さまざまな発見をしてということでは、過程が丁寧に書かれているのがいいかなと思いました。先ほど大島委員からもありましたように、５年生の発芽のところで比べてみると、どれも過程を大事にした種の発芽を取り上げているのですけれども、結論がすぐに導き出されてしまうような内容になっているのが、啓林館が水と空気と温度の三つを一緒に並べていて、子どもたちに考える時間を余り与えずに結論に結びつくような表現になっているかなというふうに思いました。それに比べて、教育出版は丁寧に段階を追って発芽についてまとめていたり。教育出版で言うと、アトムのマークで、「？」とか「調べよう」とか、これも親切過ぎてくどいのではないかと思われる方もおられるかと思うのですけれども、一応結論まで導くような、「わかった」というところで結論をまとめているというようなことでは、子どもたちも理解しやすいし、教員にとっても指導しやすいような教科書になっているのではないかなというふうに思いまして、私

は教育出版を推したいというふうに思っています。

以上です。

飛鳥馬委員長

それでは、最後、私のほうからです。

理科は、中野の子どもたちの課題ということでは、科学的な見方、あるいは自然事象についての知識理解というところがちょっと劣っているかなというふうに読み取っております。ですから、科学的な考え方ができて、自然についての知識理解が進むような教科書ということになると思うのですが、写真とか図が大きいので、体の働きといいますか、あるいは人の誕生と言いますか、その辺のインパクトが非常に強くて、「おお、すごいな」という感じがするわけです。特に教育出版と東書はすごく大きい図でインパクトがある。それで、子どもたちが興味を持つのかもしれません。それにコイとかウサギの肺とかを比較しながら出していますので、人間だけではないなと思いますけれども、いずれにしても、特に教出などは写真や絵が非常にダイナミックですよね。授業をやるときには、私は多分、教科書の絵と写真というのはそんなに大きくなくていいと思うのですね。先生が黒板に大きいのを示してくれたほうが子どもは全員見るのです。私の経験から言うと、個人個人手元で見ているというのは、先生は反応がわからないのです。「こっち向くんだよ。これだよ。心臓はここだよ」という授業をやるためには教科書の図は余り大きくないほうがいいような気もします。ただ、それは授業のやり方で、大きいのがあってもまた大きく映しても構いませんけれども、大きいからいいということではないと思うのです。

それから、動物の体の働き、あるいは人間の誕生とか、ほかのことで言いますと、例えば東京書籍だと、飛び出る体の模型が、最後のほうについていて、紙を切って組み立ててというのを子どもがやるのかなと思ったりしておもしろいなと思いました。あと、実験を大事にして、結果とかまとめがわかりやすいというのが東京書籍はあるなと思いますね。

それから教育出版のほうは、これは板書とかノートのとり方というのが子どもも参考になって、さっき山田委員からも言われたけれども、身近な生活から課題を見つけるといいますか、そういう子どもたちの生活と理科を結びつけるようになっている。それから、実験器具の表示とか説明とかというのでは、教出が丁寧かなと思うのですね。ということで、私もどちらかというと、教出か東書でいいかなと思っています。

そうしますと、今出てきているのは、教出、東書というのが一番多いのですね。山田委員はさっき幾つか挙げられた中で、東書も教出も挙げられているのですが、どうでしょう

か。何か補足ありますか。あるいは、大島委員からは、東書は出ているのですけれども、教出は余り出ていないのですが、どうでしょうか。

大島委員

東京書籍は使いやすいかなと思ったというお話はもちろんしたのですけれども、教育出版がそれより劣っているということは全然なくて、さっき言ったように、人の命のところでメダカというようなのが初めにないということはあるのですが、それは後のほうで「受け継がれる命」という別の項目になっていて、メダカと対比して、むしろもっと詳しく説明されているのですね。

教育出版のほうは、子どもがまとめを書いているというカードとかノートなどの写真が出ていて、児童がそういうことを自分でまとめているというようなイメージが割と多いのですね。東京書籍は、ただ表にしている、それで、まとめが書けるみたいな感じになっていまして、子どもがやっているというようなイラストみたいなものは余りない。それから、教育出版のほうは、板書みたいな形で発芽には何が必要かみたいなことを書いてあって、周りにイラストで、子どもたちがそれを見て何か言っているというような、教室で子どもたちが実際に学習活動をやっているというようなものをイラストなどで取り入れているというところが、主体的に子どもたちが自分で考えたり活動したりするという観点から教科書をまとめているという点が大変いいかなと。子どもが書いた観察カードみたいなものを使って説明しているというようなものが結構随所に見られました。５年の36ページのメダカの卵などというのも、だんだん発達段階を図解しているのですけれども、生徒がそれを書いているというような形にしていたり。そういう意味では、さっき出た自分たちで主体的に勉強する、主体的に調べるというような観点から教科書をまとめているような形になっているので、教育出版でもなかなかいいのではないかと。今、皆さんのお話を聞きながら改めてそんなふうに思っています。

飛鳥馬委員長

どうもありがとうございました。

それでは、各委員から出た意見、例えば山田委員から「身近な子どもたちの生活と結びついている」とか、高木委員から「板書が丁寧でわかりやすい。教科書もボリュームがあるけれども」という話がありました。大島委員から「子どもたちが主体的に学べる」という話がありました。教育長のほうからは「なかなかハンディにまとまっている」ということがありました。

それでは、委員の意見、それから、教科書採択基準からしますと、教育出版が最適であると思いますので、理科につきましては教育出版を採択候補とすることに異議はございませんでしょうか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

飛鳥馬委員長

異議がございませんので、理科は教育出版を採択候補といたします。

それでは次に、生活科の教科書の協議に移ります。各委員の発表、ご意見を伺う順番は、大島委員、山田委員、高木委員、教育長、私という順番でございます。

それでは最初に、大島委員、お願いします。

大島委員

では、私のほうから。

生活科というのは１年生と２年生で学ぶ教科でして、具体的な活動とか経験を通して、自分と身近な人とのかかわり、社会とのかかわり、自然とのかかわりということに関心を持ち、自分自身にかかわる事柄についてよく考えさせる。自立への基礎を養うというのが教科の目標だということになっております。１年生のほうで自然とのかかわり、動植物とのかかわりというのに比較的重点が置かれていて、２年生になって社会とのかかわり、町ですとか地域ですとか、そういうほうに目を向ける、こんなふうな構成になっている教科書が多いかと思います。全部で７社から教科書が出ておりますので、比較するのも結構大変なのですけれども、各社それぞれ工夫をしていると思います。

まず特徴的なところとしては、一番初めのところですね。ともかく生活科は、１年生になって初めて学校で勉強するというときに、学校生活とか学習への導入部という位置づけがあるものですので、教科書の初めのところがやはり大事だなと思うわけです。そこのところで各社が使っている写真とかイラストとかがそれぞれ特徴があります。教育出版のものなどは、そういう点では、初めに学校生活の全体図とか全体的なイメージがつかみやすい図になっていると思います。それと、学校に行くこれからの生活がこうなるんだよというようなことを示すために、朝起きる時間の時計も書いてあるのがまたいいと思うのです。７時半ごろ起きて、朝食を食べて学校に登校してとか、そんなような一日の生活のイメージというのもわかったりしてなかなかいいのかなと。全体図がつかみやすいという点では学校図書もありますけれども、大日本図書などは、子どもにはちょっと親しみにくい、具体的な生活のイメージがわかないような絵だなと。東京書籍の初めのページも、学校生活

全体像というのがちょっとわからないような絵になっている。光村も、初めに大きな人物の写真などはあるのですけれども、学校の全体像はイメージしにくい。啓林館も、学校に登校するところのイラストはあるのですけれども、学校生活全体のイメージはつかみにくい。日本文教出版も、初めのところが全体像としては物足りないとか、各社いろいろあります。

それから、あいさつということについての扱いもいろいろありまして、文教出版などはあいさつのことは余り具体的に書いていない。教科書には出てこない。啓林館もあいさつについては余り取り上げていない。それから、光村も、下校する場面が22ページにありまして、あいさつは出てくるのですけれども、非常に見づらい。それから、東京書籍は、あいさつはある程度は出てきますけれども、学校図書もあいさつについて一応取り上げています。教育出版は、その点、あいさつの言葉は結構大事に取り上げていて、上巻では87ページに「あいさつのことば」というのが出てきますし、88ページの「はっぴょうしよう」というところでもそういう言語活動の一環として取り上げたりしていまして、ともかく、あいさつについての扱いが教育出版は結構丁寧だなと思いました。

それから、安全ということについての項目なのですけれども、各教科書である程度一応は出ているのですが、重点の置き方がいろいろあります。学校図書も下巻のほうで交通安全についての話と、道具の安全な使い方というのが出てきますし、東京書籍も、「まちたんけん」という項目の中で安全についてちょっと出てくるのですが、とりたててそういうことに焦点を当てて出てこない。そういう点で教育出版は、上巻のほうでは交通安全とか、下巻のほうでは災害についての安全ですとか、不審者のこととか、結構重点を置いて取り上げているというようなことです。

あとは、アサガオを育てて観察するというようなことが各社の教科書で出てくるのですけれども、このアサガオの観察カード、芽が出たよとか、花が咲いたよとか、そういうのも結構特徴がありまして、そのカードの字がいかにも１年生が書く字みたいなつたない字で書いたものが載っているのと、比較的書写の見本に近い、きれいに書いてあるのとあって、その扱いが各社おもしろいなと思います。例えば学校図書はつたない字で書いてありますし、大日本図書は観察カードが小さくて見にくいというようなカードの特徴があります。東京書籍の観察カードの字は手書きなのですけれども、比較的きれいな字で書いてある。教育出版は、その点、手書きなのですが、きれいな字で書いてある。あと、文教出版のものなどは、アサガオの観察についてはごちゃごちゃした感じで、全体にわかりにくい

なという印象を持ったりしました。光村図書もアサガオの観察カードの字が子どものつたない字で書いてある。

もちろん、そういうつたない字のほうが現実的だし、子どもの実際に合っているのですけれども、一方、この間書写の教科書を選びましたけれども、書写できれいな字を書きましょうというようなことも学校で学習するので、そういう意味の見本になるというかお手本になるようなものを示したほうがいいのではないかと私個人は思っております。そういう意味で、実際の写実的な子どもの字でなく、見本になるような字のほうが、実際には１年生はそんな字は書かないでしょうけれども、教科書の字としてはいいのではないかという点で、きれいな字で書いてある東京書籍とか教育出版とかがいいのではないかと思ったりしています。

それから、構成の点について、例えば大日本図書などは、上巻では動物・植物とのかかわりが中心で、その他の点、例えば学校生活とか友達とのかかわりとか、そういう人間とのかかわりの関係が非常に少なくなっていて、バランス的には、１年生であっても、学校生活になじむ、学習がこれから始まるという意味で、学校の中での生活とか友達とのかかわりとかもある程度取り上げるほうがいいのではないかと思っています。そういうバランスという点からすると、教育出版などは、上巻のほうで、動物、植物もたくさん出てはくるのですけれども、友達だとか、家族との触れ合いということも結構重点を置いて出てきますので、構成的にいいのではないかと。

あと、気がついた点としては、光村などは、全体に絵の中に人間の写真を張りつけたという絵でいろいろなものを示しているのがたくさん出てくるのですけれども、これは非常に不自然な感じで、私としては余りいい印象を受けませんでした。写真なら写真、イラストならイラストでいいと思うのです。

あと、啓林館では「せいかつ名人ブック」というのが別冊でついていまして、そこでいろいろな遊びのこと、植物図鑑的な、資料集的なことがその中に含まれているのですけれども、判も小さくて、絵とか説明も小さくて、１・２年生では使いづらい。現実的には使えないのではないかというような感じがいたしました。

全体的な構成のこととか、写真とか、絵とか、そういう印象的なことも含めて、教育出版のものがいいのではないかというふうに私は思いました。

以上です。

飛鳥馬委員長

では、山田委員、お願いします。

山田委員

生活科ですけれども、１年生、２年生で使う単元ですが、今の子どもたちは、生活習慣の問題とかありますので、今の家庭での生活から学校での生活への導入という点では、この教科書で学ぶ生活科というのは大切なことになってくるだろうと思いますし、もう一つは、今の子どもたちが自分に対して自己肯定感といいますか、セルフエスティームといいますか、そういったものが培われるようなことも必要ではないかなと。そういった中で、自分のよさとか可能性に気づくということから考えますと、あいさつということでの視点もかなり重要になってくる。そんなことで見ていきますと、あいさつが非常に重要視されている教科書としては、東京書籍であったり、学校図書、教育出版、日本文教出版、啓林館、多くの教科書であいさつというものはかなり重点を置いて書かれているように思います。

また、今の学校の中では、地域の中での安全を含めての学校安全というのも大きなテーマではないかなと思います。そんな中では、大日本図書は、安全に対しての配慮はあるのですけれども、少しわかりにくいかなということがあります。他の教科書の中では、例えば教育出版では、まち探検での交通安全を確認するとか、非常に丁寧に書いてありますし、日本文教出版でも、不審者についての確認とかが書いてありました。啓林館では、中野で取り上げていますように、子ども110番についても触れておりましたし、光村はまち探検の中で交通安全について簡単に触れています。

先ほど大島委員から発言がありましたように、啓林館は別冊で小さな版がついているのですけれども、この意図が果たして子どもたちにきちんと伝わるかどうかはちょっと難しいかなというふうに思っております。

また、先ほど大島委員から発言がありましたように、子どもたちが学校に入って生活習慣を含めての生活規範を学んでいくということの中での配慮がされているのは、教育出版が、時計が書かれていまして、何時になったら起きるよとか、そういったことが子どもたちにビジュアル的にわかりやすく書かれている。また、そういった中での言葉は簡潔に記載されている。子どもたちにとっては学びやすい手法が多いのかなと。また、「まほうのことば」とか、「ひろがることば」とかで伝える言葉がまとめられていて、中野区の教育委員会で目指しているコミュニケーション能力についても比較的配慮されている教科書ではないかなと思います。

あと、多分、生活科というのは、季節的なことでの取り組み、春夏秋冬ということではないかなと思うのです。例えば、夏休みということを単元で取り上げている教科書がかなり多いのですけれども、教育出版などでは、「なつやすみ、まいにちできるかな」で、「はやくおきているかな」とか「はをみがいたかな」「ラジオたいそうにいっているかな」「しゅくだいをやっているかな」とイラストで書いてあります。同じようなことで、啓林館も、「まいにちがんばるよ」ということで、「あさはやくおきようよ」とか「ラジオたいそうにいこう」というような取り上げ方をしていました。東京書籍も、「なつやすみをたのしくすごそう」ということで、イラストにはなっていますけれども、ここでは買い物にお母さんと一緒に行くとか、アサガオを育てるとか、ここでも「あさ、きちんとおきよう」とか、そういったことがイラストで書かれていますので、恐らく学校の中では、このイラストを使いながら、夏休みはこんな生活をしてくださいねというメッセージが出されるのかなと思っていました。

一方、その夏休みの取り上げ方では、光村も取り上げてはいるのですけれども、「なつ、だいすき」ということで、特別に夏休みに関連して何かということでの記載はなかったようです。また、学校図書も、「なつのあそび」ということで、「ひざしがまぶしくなってきたね」という取り上げ方ではありますけれども、子どもたちが夏休みにどんなことをしようかということの視点は少し弱いかなと。大日本図書は、夏のお祭りですとか、バーベキューとか、そういう取り上げ方をしていて、夏休みは楽しいことがいっぱいあるよということではありますけれども、夏休みに生活の規範意識を育てるにはちょっと弱いかなということであります。

そういったことを踏まえて、今までの経過の中では、子どもたちにとって学びやすいということの視点からいきますと、教育出版が一つ抜けているかなというイメージを持ちました。

私からは以上です。

飛鳥馬委員長

では、高木委員、お願いします。

高木委員

生活の教科の目標が「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う」ということで

すので、３年生以上でやる社会や理科の縮小版というよりも、自然や社会とのかかわりを体験的に身につけさせる。物の考え方というか、そういうところに主眼があるのかなと私は解釈しました。

言うのは非常に簡単ですけれども、難しいですよね。私も「生活」というのを昔聞いたときに、そんな科目をつくってどうやって教えるのかなという印象を持った覚えがあります。例えば、東京書籍さんは巻末に「ポケットずかん」というのがついていまして非常に興味をそそるのですが、生活の「上」を見ると、春ですと、出てくる虫がモンシロチョウ、ミツバチ。ここら辺はいいのですけれども、ナミテントウですとかナミアゲハ、ヤマトシジミとかは、中野の子どもにはちょっと。次をめくっても、アオスジアゲハ、ヒグラシ、オニヤンマ。中野にはほとんどいないです。これは知識としてはいいと思うのです。あるいは、田舎があるお子さんはいいのですけれども。私も下の子がまだ２年生なので去年も平和の森公園にセミ採りに行きましたけれども、半分もいないかな。平和の森公園ですとか江古田の森公園は昆虫は比較的多いですし、植物はあるのですけれども、これを学習していくというのはなかなか難しいかな。知識としてはいいのですけれども、実際に学校の授業の中で考えさせるというと、せっかくついているのに生かせないのかなと。

また、大日本図書も、中ほどに「いきもの」が出てきますけれども、イボバッタとかシロスジカミキリとか、この辺にはなかなかいないかなと思います。例示ですから、それは余り気にすることはないのかもしれませんけれども、すべての出版社で観察カードのところがやはり具体的に先生が教えていくところで共通に出ているのかなと。大島委員も指摘されていましたけれども、７社中６社が扱いやすいところでアサガオを扱っていて、それを見ると、教育出版が、観察カードを子どもが見たときに、こういうふうに書くのかなと視点的にも入っていきやすいので、そういう意味では、これは子どもが見てもわかりやすいし、先生も教えやすいのかなと思います。私もこの中では教育出版が中野の子どもには一番合っているのではないのかなと思ったところでございます。

飛鳥馬委員長

では、教育長、お願いします。

教育長

生活科については、自分の生活、身の回りの出来事や生き物などを気づくということと、先ほど山田委員からもありましたけれども、自立への基礎ということで、自己を確立して、自己肯定感を持てるようなさまざまな取り組みをしていこうということだというふうに思

うのです。そうしますと、自立への基礎とか、自己の確立ということでは、人間関係の中で自分の位置を確認していくということでは、あいさつであったり、家族を大事にしていく。特にこれからの子どもたちには家族というものをとても大事にしてもらいたいなという思いも非常にあります。そういうことでは、教育出版と学校図書、光村がそういうものを比較的丁寧に扱っているかなというふうに思いました。

それから、特に１年生、２年生の低学年の子どもたちが学ぶ教科書ですので、自分の生活を思い浮かべられたり、自分の地域や身の回りを思い浮かべられる教科書がいい。特に中野の子どもたちの地域に合った教科書がいいなというふうに思いますと、先ほど大島委員からもありましたけれども、光村の教科書は本として構成とか表現は非常に高度なもので、工夫をされていると思うのです。先ほどありましたように、ちょっと奇異だなと思うのですけれども、絵の中に写真があったり。それから、絵がとてもきれいなのですけれども、どちらかというと、中野の子どもたちの身近な絵ではなく、草原であったり、山であったりということで、大自然の中の題材が非常に多くて、子どもたち自身が身近に思い浮かべられるものがなかなかないのではないかなと。教師も教えていくのになかなか難しいのではないかなという印象を持ちました。

それから、３年生以降の理科や社会につながるということでは、私、先ほどの理科でも言ったのですけれども、観察カードのところがちょっと気になったのでずっと見てきました。やはりカードについては各社それぞれ特色があるのですけれども、東京書籍や大日本、光村というのは、カードが見にくかったり、表現の仕方が子どもたちになかなか合わないのではないかなと思いました。

それから、何人かの委員からも出ていますけれども、「せいかつ名人ブック」がついている啓林館は、子どもも教員もなかなか扱いにくいものではないかなというふうに思ったり、「せいかつ名人ブック」自体は内容がすごく充実していて、これだけでも見ていて楽しいかなと思うのですけれども、子どもたちが自主的に図書館の図鑑で調べたりとか、そういう活動も大事にしていきたいと思いますので、そういう意味では、調べ学習にはちょっと妨げになったりするものではないかなと思いました。

そういうことで、さまざま各社の特色を見ながら、中野の子どもたちに合ったものはどんなものかなというふうに見ますと、私としては、教育出版、あるいは学校図書で、全体的に、観察カードでありますとか、生活の中では、四季の変化も工夫して子どもたちに教えていきたいなと思いますので、そういう四季の変化なども丁寧に教えているのは教育出

版ではないかなというふうに思いました。

以上です。

飛鳥馬委員

私のほうからです。

子どもの実態とか、３年生以降のことを考えると、私は、自立や人間関係についての内容を重視したいなと思っているのです。

そうすると、皆さんから出ているように、一番適しているのは教育出版かなと思います。教育出版は、小１プロブレムといいますか、考えてみると、幼稚園、保育園から学校へ上がってくるときに、教科書そのものが家庭から学校につながる出発、生活が家庭と学校へつながっていく、そんな一日の流れ等が出てくるのかなと思うことがあります。それから、皆さんから出ている時計があって、何時にはどういう状況というか、どういう行動、活動といいますか、そういうのが非常にわかりやすいのではないかなという気がします。

それから、写真とか絵も大きくてきれいだと思います。それから、前にも申し上げましたけれども、子どもの記録みたいなものが大人のきれいな文字で出てくるので、子どもの読みにくい字よりはずっといいのかなというふうに思います。

あと、光村もいいところがいろいろありますが、ちょっと高度だという話がありました。指導室長、ちょっと一つ聞きたいのは、光村の教科書の中にオリジナルの歌、オリジナルソングがあると。これはどういう意味なのかがよくわからないのです。例えば、下巻でいえば最初の２、３ページに出てくるのですね。上巻では、後ろのほうにありましたよね。94、95ページですか。これは出版の趣旨みたいなものを見ると、１年間通してクラスで歌うみたいな感じがあるのですけれども、著名な作詞家の歌なのでしょうか。これは活用している学校があるのかどうか。何か情報があったら。わからなかったらわからないでいいです。

指導室長

ほかの教科書にも部分的にあるようですけれども、光村を見ていただきますと、シンガーソングライターの方がこの著者に入っていらっしゃるということはあると思います。

あと、生活科の性格として、合科的な扱いというのでしょうか、他教科との関連を図るということから、歌を歌うこともここに入れていこうという趣旨だというふうには思います。ただ、実際に活用されているかどうかはちょっとわかりかねます。

飛鳥馬委員長

わかりました。

それでは、今、生活科を伺いましたが、皆さんほとんど教育出版ということでありました。各委員の意見、それから、教科書採択基準からしますと、教育出版が最適であると思います。生活科につきましては、教育出版の教科書を採択候補とすることに異議はございませんでしょうか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

飛鳥馬委員長

異議がございませんので、生活は教育出版の教科書を採択候補とすることにいたします。

それでは、次は、音楽になります。音楽は、山田委員、高木委員、大島委員、教育長、私という順番でご意見を伺いたいと思います。

それでは最初に、山田委員、お願いします。

山田委員

音楽ですが、音楽は３社です。東京書籍、教育出版、教育芸術社から出版されております。主に音楽は、合唱の部分と楽器・器楽の部分と音楽づくり、あとは鑑賞の部分ということではないかと思います。中野は、音楽は専科の先生方が配置をされていますし、合唱コンクールなどがあったりして、子どもたちにとっては比較的関心が高いといいますか、いろいろな場面で、もちろん、今の子どもたちは小さいころから音楽に接しているわけですから、それをどのように取り込むかということではないかなと思います。

最初に、楽譜と子どもたちが出会うわけですから、楽譜が大きく、また見やすいということも低学年では必要ではないかなと思います。東京書籍などは、ディズニーのキャラクターをかなり配置していますけれども、楽譜が大きくて見やすいということでは教育芸術社が比較的わかりやすくなっているかなと。また、イラストもおのおのの教科書でかなり使ってはおりますけれども、イラストの中では、教育出版は少し見えにくくなっているようなイメージがあります。教育芸術社などはそれが比較的よくわかっているかなということです。

また、教科書の大きさからは、教育出版と教育芸術社はＡＢ判、比較的大きな判があって、東京書籍は普通のＢ５判ということですから、それはどちらが使いやすいか。ただ、大きくても別に問題はないのではないかなと思います。

３年生の中での「春の小川」などのところでは、階名が入っているのが東京書籍、教育芸術。教育出版はそういったことはありません。楽器の取り上げ方、多くはリコーダーを

使うのだと思います。リコーダーは、タンギングという手法が大切なのではないかと思うのです。３社ともそのタンギングを丁寧に取り扱ってはいますけれども、教育芸術が赤い帯で説明されていて比較的わかりやすく、また、６年生の巻末でのリコーダーの取り上げ方が教育芸術のほうが比較的きちんとできているかなと思いました。

そういった中で、どの教科書も非常によくできている教科書ではないかなと思いますけれども、教育芸術社が比較的すぐれているのではないかなと思いました。

私からは以上です。

飛鳥馬委員長

ありがとうございました。

では、高木委員、お願いします。

高木委員

音楽はなかなか難しいです。学校公開とか、必ず音楽室をどこかの学年が使っていますから見るのですが、教科書をじっくりやっているところというのはなかなか見ることがないので、ちょっと実感がないところでございます。

３社それぞれいいところがあると思いますが、私はどちらかというと音楽は苦手だったので、わかりやすいということの観点から言いますと、教育芸術社の教科書は、おたまじゃくしを見る段階でちょっと苦手という子どももいると思うのですが、これは大きくて、写真などもはっきりしていて、そういう点は少し軽減されるかなと思います。

あと、音楽が苦手な子というのは、音符や音楽記号というのがいまひとつぴんとこないと思うのですが、そこの説明が一番しっかりしているかなというところなので、この中では教育芸術社が一番いいのかなと思います。

以上です。

飛鳥馬委員長

では、大島委員、お願いします。

大島委員

３社の教科書はいずれもそれぞれ工夫していると思いますし、楽曲の取り上げ方なども特色があると思います。

どういう曲を取り上げているということ以外の点で比べてみますと、一つは、今山田委員のお話にもありましたけれども、３年生の共通教材である「春の小川」の楽譜が出ているのですが、その音符の中に「ド」「レ」「ミ」という表記を入れているのといないのとあ

りまして、東京書籍と教育芸術社は「ド」「レ」「ミ」という音階を入れている。教育出版ではそれを入れていない。やはり「ド」「レ」「ミ」と入っているほうが子どもには歌いやすいのではないかという点。

それから、目につきますのが、リコーダーの図と指使いについてあらわした運指表の図、それから、楽譜の音符の説明とか、ピアノ、フォルテとか、クレッシェンドとか、スタッカートとかいうような、そういう音楽の基礎的な知識、用語についての解説のページのことなのですが、東京書籍と教育出版は巻末の折り込みのページになっていて、１ページ分ですか、折り込みの裏側のところにそれが全部まとまっているわけです。教育芸術社のものは、折り込みの裏側ということではなく、巻末見開き全部２ページ分を使って説明されているし、音符のこととか、四分の二拍子とかいう拍子の説明とか、シャープ・フラットの説明とか、いろいろ細かく出ております。そういう見やすく、基礎的なことを説明しているというような点から、教育芸術社のものが生徒にとっては大変いいのではないかと思います。それと、楽譜も比較的大きく表記されているというようなこともありまして、私は、教育芸術社のものが教科書としてはよろしいのではないかと思います。

以上です。

飛鳥馬委員長

では、教育長、お願いします。

教育長

音楽は、私は学校で教科書でやった記憶が余りないのです。教員が、さまざまな教材を活用してやるということなのでしょうけれども、音楽自体の持つ意味というのは、人間の心を育てるとか、優しい心をはぐくむとか、ひいては人生を楽しむ、そういう人間性を広げるような教科だというふうに考えます。そうしますと、それにふさわしい選曲があったり、これは私個人の思いかもしれませんけれども、四季折々の変化が感じられるような歌、曲が学べたり、日本のよさを感じられるような曲があると、日本人として、あるいは日本の国土や風土のよさというのを味わえるような機会になればいいななどと個人的に思うのです。そうすると、教育芸術社のページの最初のほうに「こころのうた」というのが各学年についているのです。「ひらいた　ひらいた」とか、３年生ですと「春の小川」や「茶つみ」であったりということで、そういう取り上げ方をされているのはなかなか好感が持てるのと、教科書は全体的にどの学年もそうですけれども、子どもたちが親しめてわかりやすい表現をされているということを考えると、これも教育芸術社が比較的わかりやすく、

表現も優しく出版されているのではないかなと思いました。

あと、各委員からも出ていますように、リコーダーの取り上げ方も、鍵盤ハーモニカとかもあるのですけれども、リコーダーは子どもたちが３年生以降ずっと続けるものですので、リコーダーが表現としてわかりやすく解説されているのも教育芸術社だというふうに思いましたので、教育芸術社を推薦したいと思います。

飛鳥馬委員長

では、私のほうからです。

私も、音楽は、皆さんがおっしゃる教育芸術社でいいと思います。教育芸術社は楽譜がちょっと大きいのでしょうか。全体的に見やすい感じがするのですね。写真とかイラストなどもいいのですけれども、全体的に教科書が見やすいような気がします。

リコーダーについてですが、指の使い方が丁寧に説明されています。1年生の「お父さん指」「お母さん指」という使い方がどうかなと考えましたが、今までも使っていた言葉ですから、それでクレームがつくことも余りないかな、大丈夫かなというような気がします。

あと、教育長からも話がありましたが、最初のほうの共通の歌。これは「学年の歌」と言っているものですかね。３年から６年までずっとあるのですね。あと、教育出版などで売りにしているのが、主要なところのほかに、クラスや地域、学校、先生などの好みでオプションで選べると。これは多分、「音楽ランド」のことなのかなと思うのですけれども、最後のほうに何曲か出ているのですね。だけれども、これは教育芸術社で言えば、みんなで楽しくという歌と同じような。ちょっと曲は少ないかもしれないけれども、共通しているのかなと思うので、それに余りこだわらなくてもいいかと思いました。

ということで、私も教育芸術社でよろしいかなと思います。

ほかに何かご意見ございますか。

山田委員

一つ指導室にお尋ねしたいのですけれども、小学校で日本の伝統文化的なところの音楽の取り上げ方。どの教科書にも出てくるのですけれども、小学生で日本の和楽器に接する機会というのはそんなに多くはないのではないかと。たしか、中野の子どもたちはオーケストラとの触れ合いはあるのでしょうけれども。というふうに思っているのですが、いわゆる日本の伝統文化、伝統芸能と小学生との接点といいますか、その辺をちょっと教えていただければと思います。

指導室長

まず、音楽の教科の中での扱いとなりますと、どうしてもそのまま生でということが難しい状況がございます。音楽の教員が実際に演奏できればいいわけですけれども、多くの場合は、今ＣＤですとかＤＶＤという教材もございますので、そういうもので映像も見せながら扱うということが多くございます。ただ、子どもたちにとって一番身近なのは和太鼓であります。各学校に和太鼓がございます。全員が触れられるかどうかは別ですけれども、そんな形で工夫しているところでございます。

飛鳥馬委員長

ほかはよろしいでしょうか。

（「なし」と呼ぶ者あり）

飛鳥馬委員長

それでは、各委員のご意見と教科書採択基準からしますと、教育芸術社の教科書が最適であると思いますので、音楽につきましては教育芸術社の教科書を採択候補とすることに異議ございませんでしょうか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

飛鳥馬委員長

異議がございませんので、音楽は教育芸術社の教科書を採択候補といたします。

以上で、本日午前中の議事は終了いたします。残りの種目につきましては、午後１時から教科書採択についての臨時会を開会いたしますので、よろしくお願いいたします。

これをもちまして、教育委員会第３回臨時会を閉じます。ご苦労さまでした。

午前１１時５０分閉会